『広輿図』のなかの海域世界

2010年9月1日－3日
於：広東省南昆山森林リゾート

高橋　公明（名古屋大学）

本報告の目的

I. 地図帳としての『広輿図』の資料的価値を確認する。

II. 中国の東あるいは南の地域についての関心のあり方を検討する。

III. この地図帳が海域世界の研究にどのように寄与しうるのか考察する。

Ⅰ-1 『広輿図』の出版と構成①

- 明代後半から清代にかけて7度も木版出版された地図帳である。
- 初版

1. １５５５年（嘉靖３４）ごろ、羅洪先によって、序文１丁、地図４８丁、記事６８丁、合計１１７丁からなる初版本が出版された。
2. ヴァルター・フックス（Walter Fuchs）が実見した初版本は、旅順（Port Arthur）在住の羅振玉氏の蔵書で、写真で地図のみ紹介した（1946年）。それ以降は実見した記録がない。

Ⅰ-1 『広輿図』の出版②

承前

3. 日本の国立公文書館所蔵の『広輿図』は1645年（順治2）から1667年（康熙6）の写本と推定されているが、構成が一致しており、初版本の写しである可能性が高い。

4. 境界外の諸国・諸地域として「朝鮮図」、「東南海夷図」、「西南海夷図」、「安南図」、「西域図」が各一丁、「朔漠図」が二丁収められている。

5. 以上の構成からも明らかなように、境界地域あるいは境界外についても多くの地図が作成されており、きわめて広い視野から華と四夷を描こうとしている。

Ⅰ-1 『広輿図』の出版と構成③

- 再版

1. １558年（嘉靖37）に出版。現在、アメリカの国会図書館、神戸市立博物館が全二巻を所蔵し、中国の北京にある故宮博物館は下巻のみを所蔵。
2. 構成は初版と同じであるが、版は彫りなおしている（海野、１966。高橋、２008）。

Ⅰ-1 『広輿図』の出版と構成④

- 3版

1. 1561年（嘉靖40）に出版。実見の記録なし。
2. ロシアの旧ペテルスブルグ・アカデミー（the former Library of the Academy of Science at St. Petersburg）と北京図書館が所蔵の可能性（フックス、1946。海野、1966）。
3. 「琉球図」、「日本図」、「四夷図」が追加され、43種になる。

Ⅰ-1 『広輿図』の出版と構成⑤

- 4版

1. 1566年（嘉靖45）に出版。
2. 増補により分量も増え、2巻4冊で209丁に編纂。3版から追加された地図参照。
3. 旧満鉄大連図書館、南京図書館、ハーバード大学の燕京図書館が所蔵（海野、1966．高橋、2008）。

Ⅰ-1 『広輿図』の出版と構成⑥

- 5版

1. １５７２年（隆慶６）に出版。
2. １９世紀半ばごろまではその存在が確認できたが、現時点ではまったく手がかりはない。

- ６版

1. １５７９年（万暦７）に出版。
2. 版の縦横の比率がやや横長になる。
3. 日本の尊経閣文庫が全巻、天理図書館が一部を所蔵。

Ⅰ-1 『広輿図』の出版と構成⑦

- 7版

1. １７９９年（嘉慶4）に出版。
2. 地誌的な記事のなかから韃靼、兀良哈、女直などが削除（海野、１９６６年）。
3. 日本国内だけでも、京都大学人文科学研究所、同文学部、東洋文庫、東京都立中央図書館（市村文庫）などが所蔵。

Ⅰ－2 『広輿図』の反響

- 海野一隆は、1557年（嘉靖36）から1838年（道光18）までに35種の書籍において『広輿図』所収の地図の引用が見られることを確認（1975）。

1. 地誌（外国誌を含む）13種
2. 軍事（九辺・海防など）9種
3. 政治4種
4. その他9種

Ⅰ－3 『広輿図』の西漸

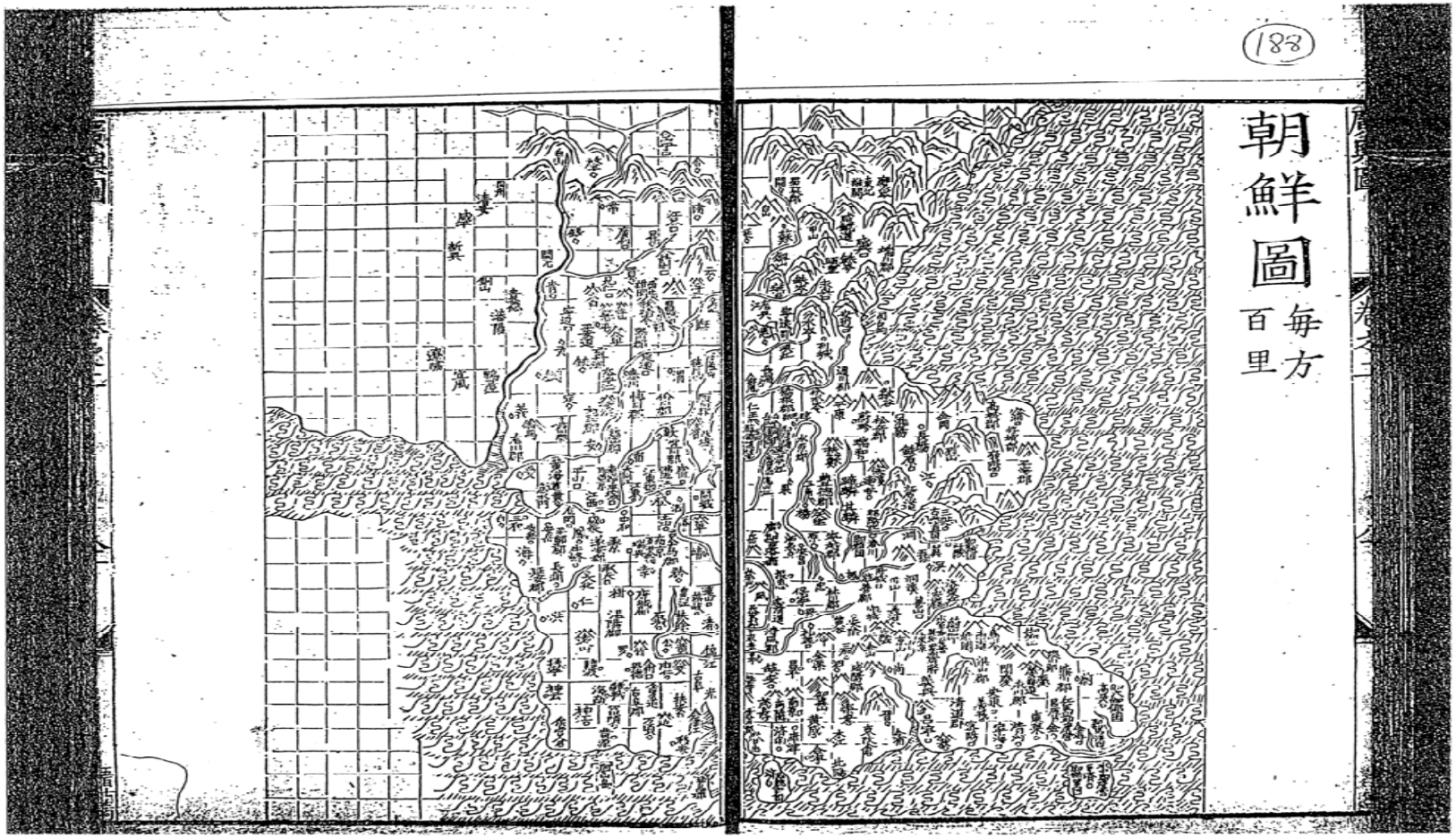
- 海野一隆は、16世紀中頃から17世紀末に至る期間、『広輿図』およびその系統の地図がヨーロッパの地図にどのような影響を与えたかを検討（1978および1979）。

1. 1588年（万暦16）、イエズス会士ルジェリが『広輿図』をもちかえり、1590年、ローマでシナ全図を作成。
2. 1655年、イエズス会士マルチーニ『新シナ地図帖』（Novus Atlas Sinensis）をブラウが出版。
3. 地図上に砂漠を表記する『広輿図』の技法（黒く塗る）がヨーロッパにも広まる。

Ⅱ－1　四夷の世界：朝鮮と安南

1. どちらも初版から掲載され、明にとって重要な東夷であることが示されている。
2. 安南図：未検討。
3. 朝鮮図：地名は15世紀以降を反映、地形は朝鮮製の地図にも類型を見ない。半島東南端が東に曲がっている。島は巨済島、済州島、珍島、郡山島のみ。黒山島、対馬島なし。地図参照。

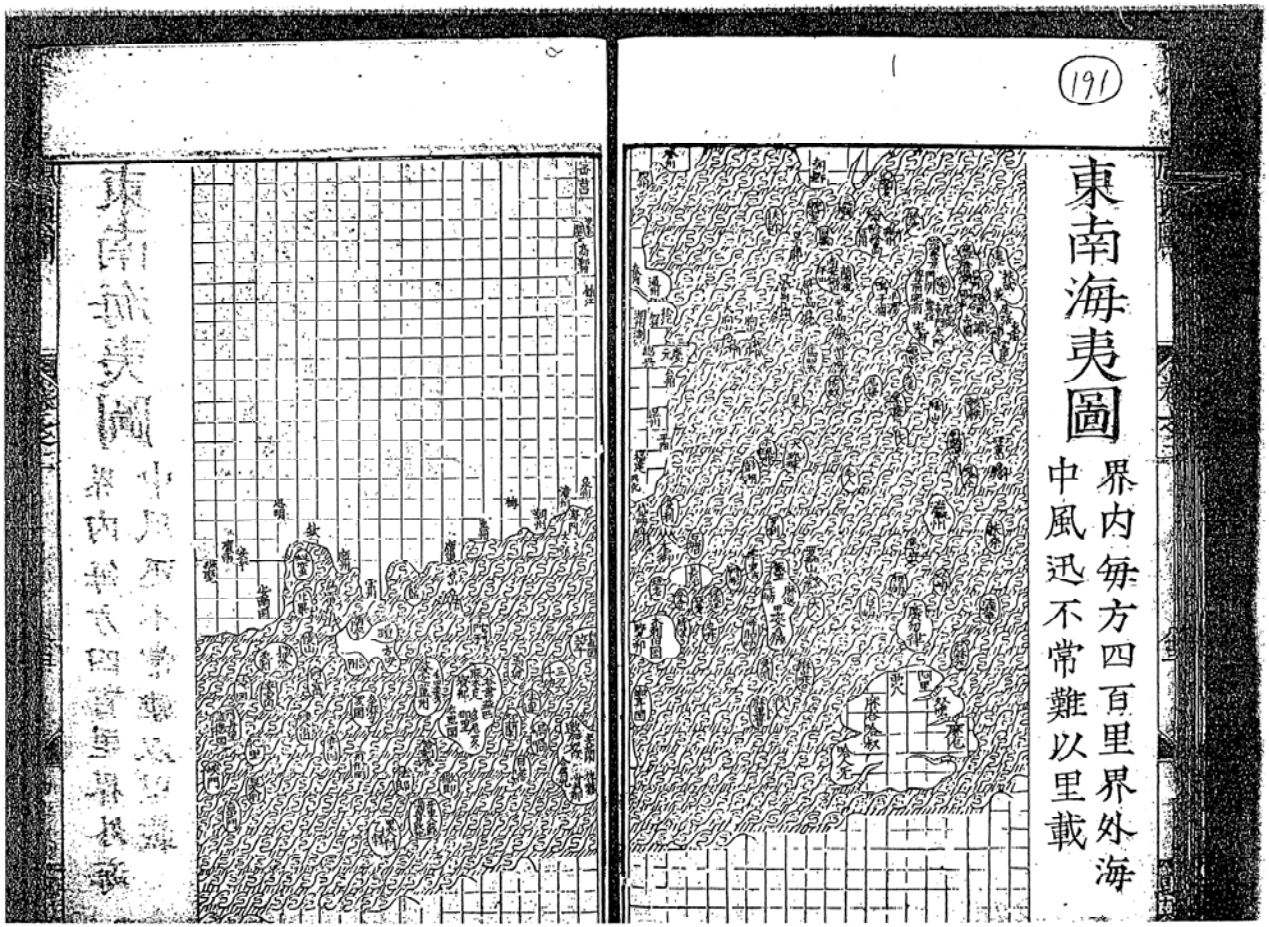
朝鮮図（4版）
ハーバード大学燕京図書館蔵



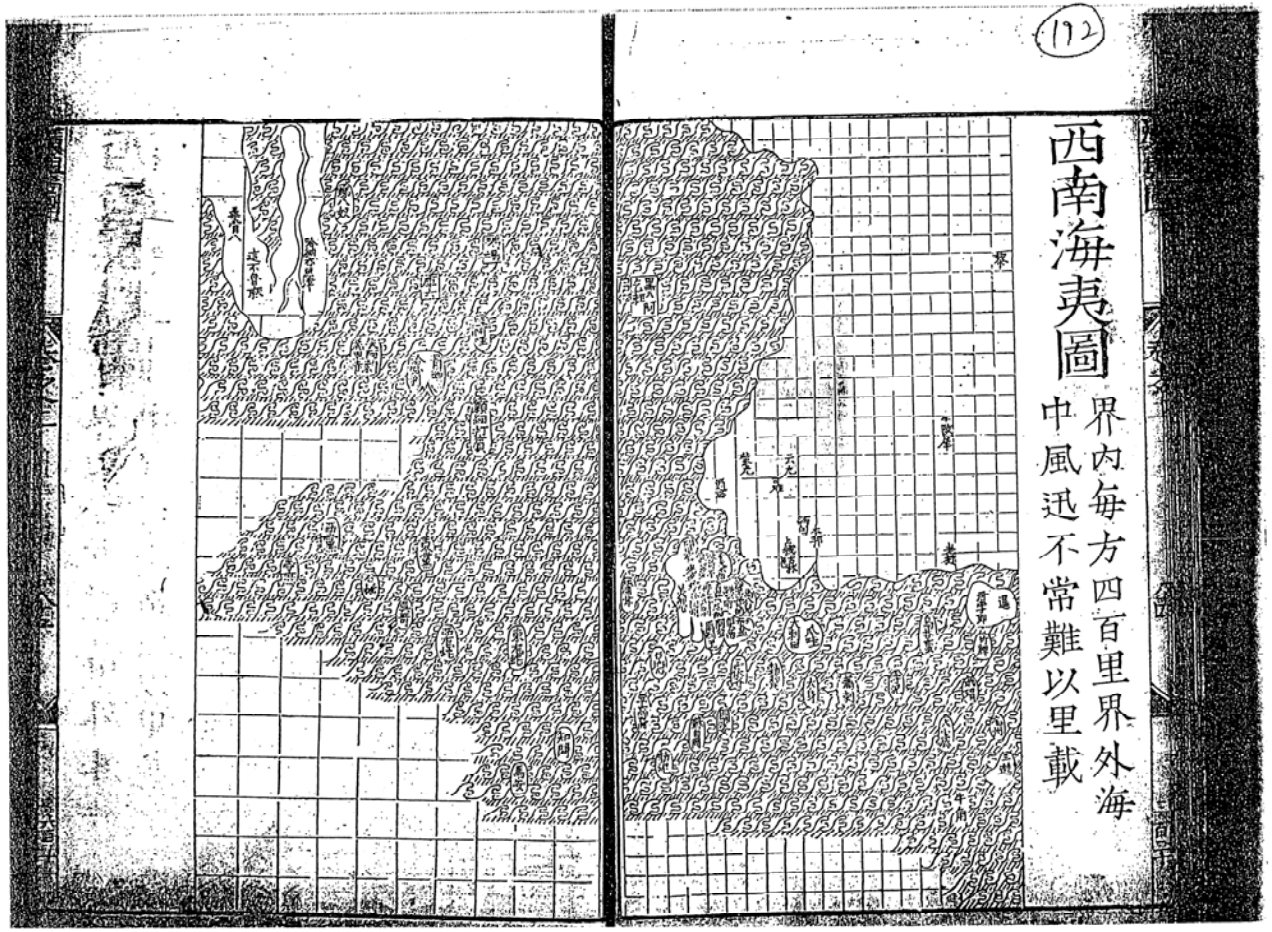
Ⅱ－2　四夷の世界：南海①

1. 東南海夷図・西南海夷図ともに初版から掲載。
2. 声教広被図系地図あるいは李沢民系地図：アフリカ大陸、ヨーロッパ、地中海、アラビア半島などユーラシア大陸の東から見ればかなり遠方まで描き、かつ中国で南海諸国と呼ばれている現在の東南アジア・南アジアに関する多くの地名を海のなかにちりばめている。地図参照。
3. 地理情報：イスラム系の世界図から得られたもの（高橋正、１963年、１966年、１973年）。

東南海夷図（同前）



西南海夷図（同前）



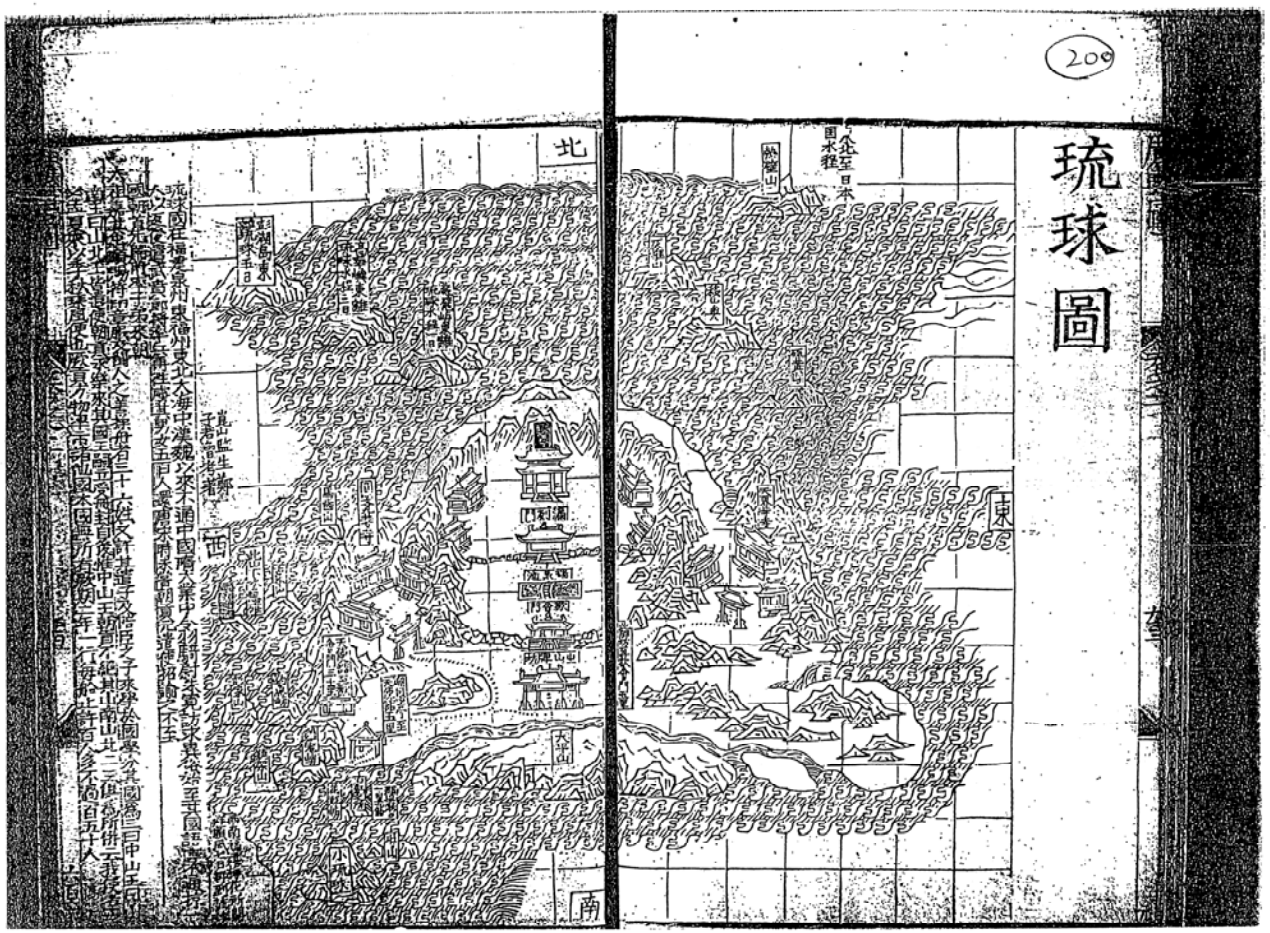
Ⅱ－2　四夷の世界：南海②

4. 李沢民：元末明初に四明地域（現在の寧波）で活動した李汝霖のことで、「声教広被図」とは、「声教被化図」であると宮紀子によって推定（2004年）。
5. 朝鮮に関して：『広輿図』所収の「朝鮮図」よりも古い情報が多く、地形も異なる。
6. 日本、琉球に関して：3版以降に追加されたにも関わらず影響を受けていない（後述）。

Ⅱ－3　四夷の世界：琉球

1. 3版から掲載。
2. 地図の系譜：不明。唯一のモデルとなりうる朝鮮の『海東諸国紀』（1471年）の「琉球国図」とも異なる。地図参照。
3. 描写：首里城の描写詳しい。福建への航路、「泊船之所」、「迎恩亭」、「天使館」など中国からの使節に関する記述あり。
4. 記述：この地域と中国との歴史についての記述あり。
5. 「東南海夷図」の琉球関係への反映はない。

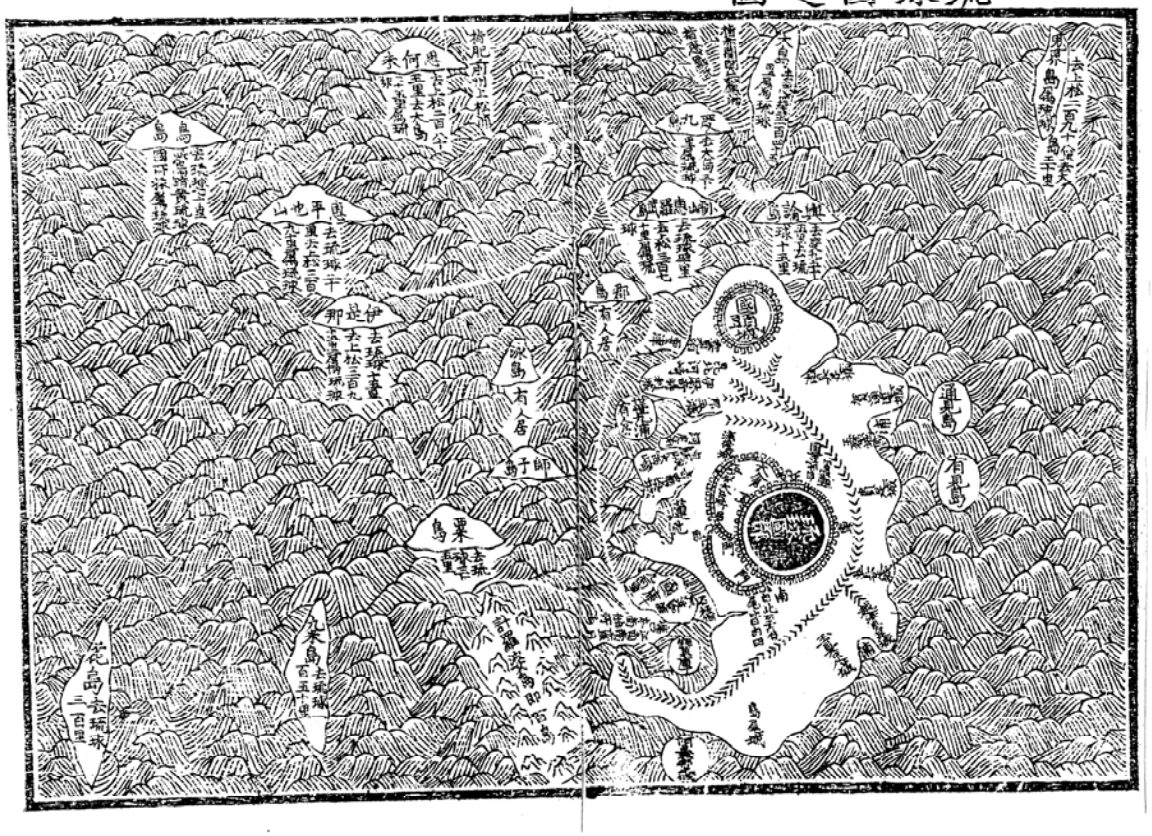
琉球図（同前）



琉球図（海東諸国紀）

Map 4 Hae-dong-che-guk-ki

Ryukyu

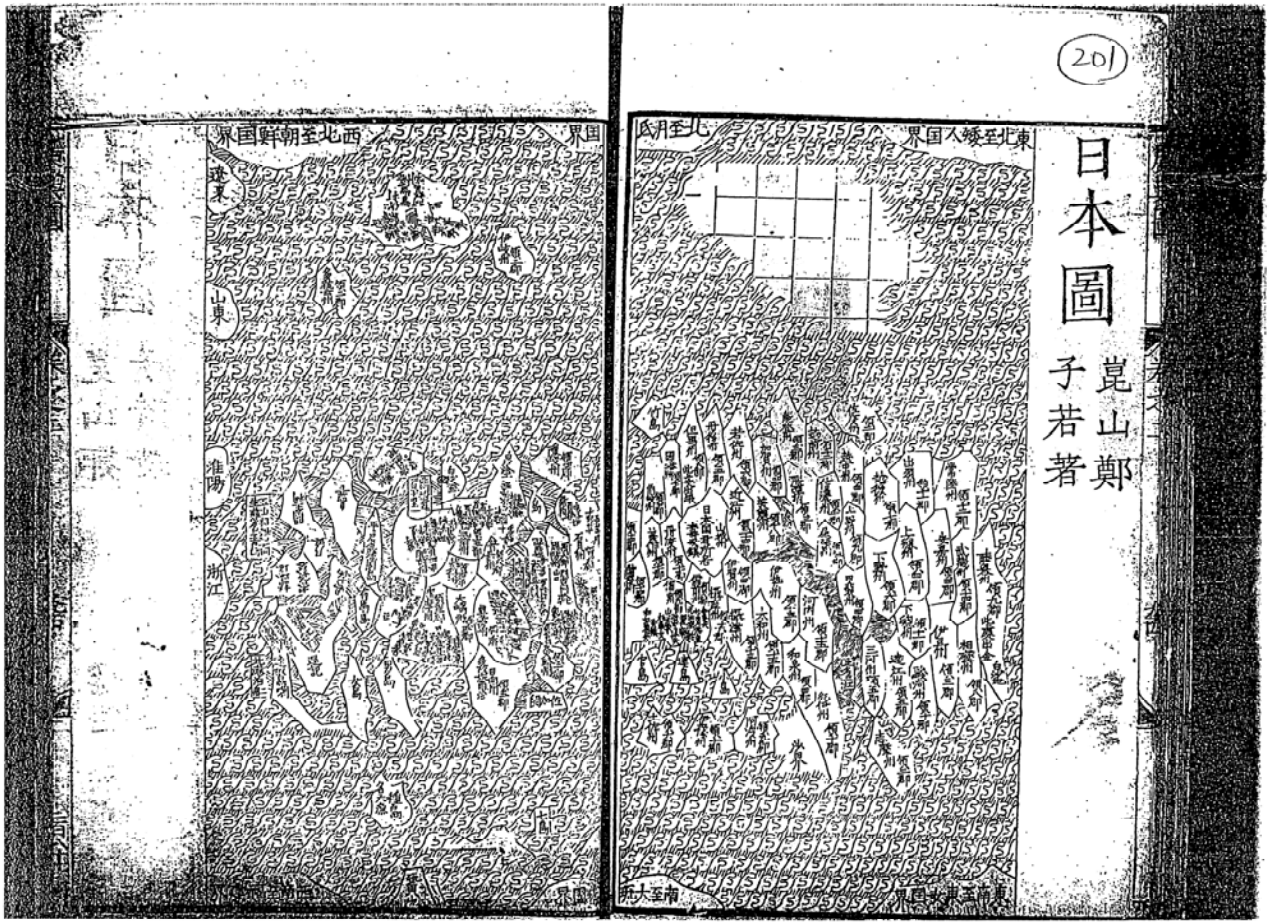


Ⅱ－4　四夷の世界：日本①

1．3版から掲載

2．地図の系譜：「崑山鄭子若著」と地図中にあり、『日本図纂』（1561年）を書いた鄭若曾の「日本図」であることは明白。鄭若曾は倭寇対策のために胡宗憲によって日本に派遣された人で、王直の中国への誘引、大友氏との交渉などをおこなった。まさに同時代の日本についての最新の地理情報によって作成された地図である。地図参照。

日本図（同前）

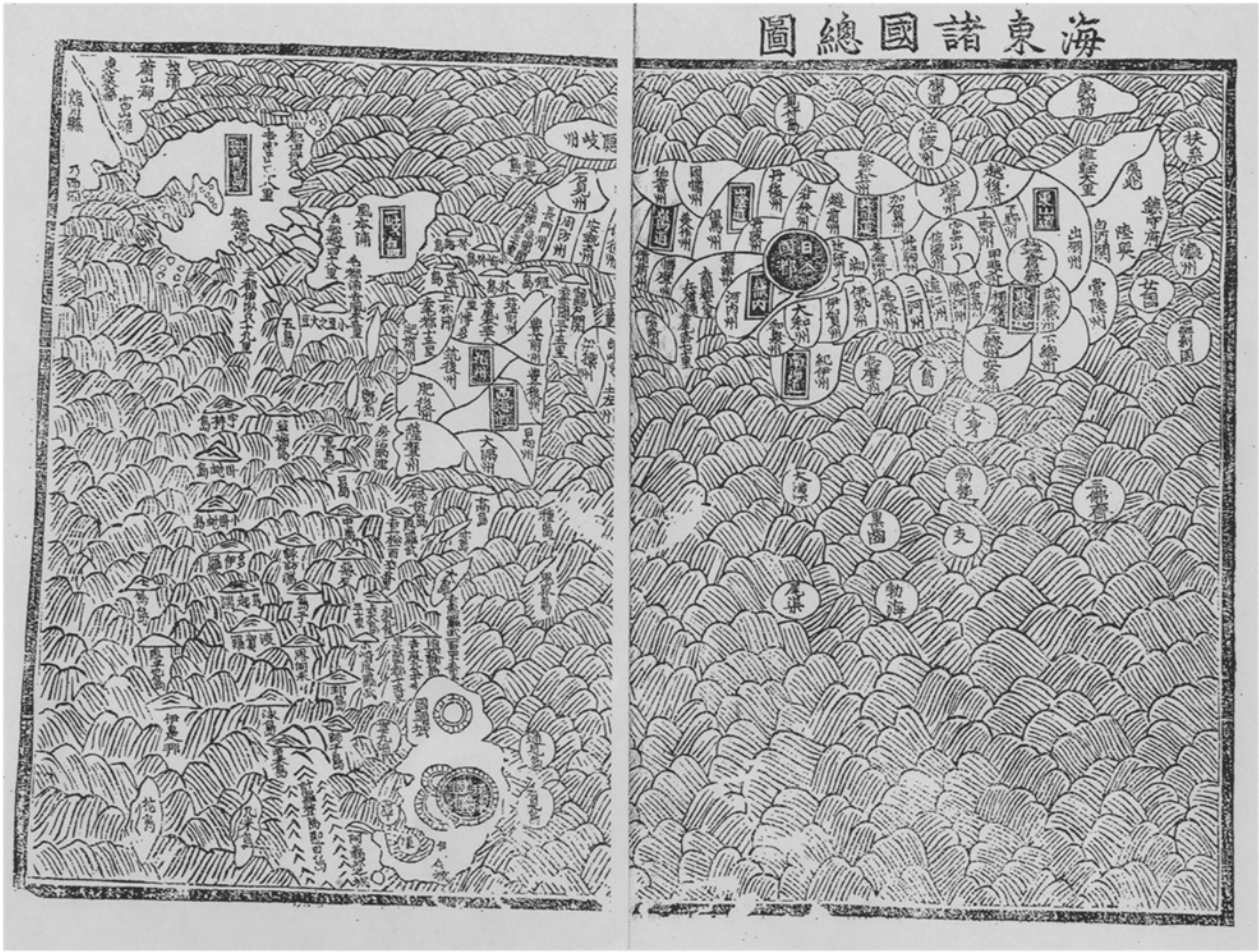


Ⅱ－4　四夷の世界：日本②

３．五島列島を中心として、九州周辺を詳しく描写しており、１６世紀後半の日本列島との関係を象徴している。『海東諸国総図』との違い。

４．「東南海夷図」の日本列島の描写との関連を推定する見解もあるが（高橋正、１９８０年）、元代の地理情報によって構成されている「東南海夷図」において、日本図だけが新しい情報で描写されると考える理由はない。すなわち、「日本図」の掲載によって「東南海夷図」は影響を受けず。

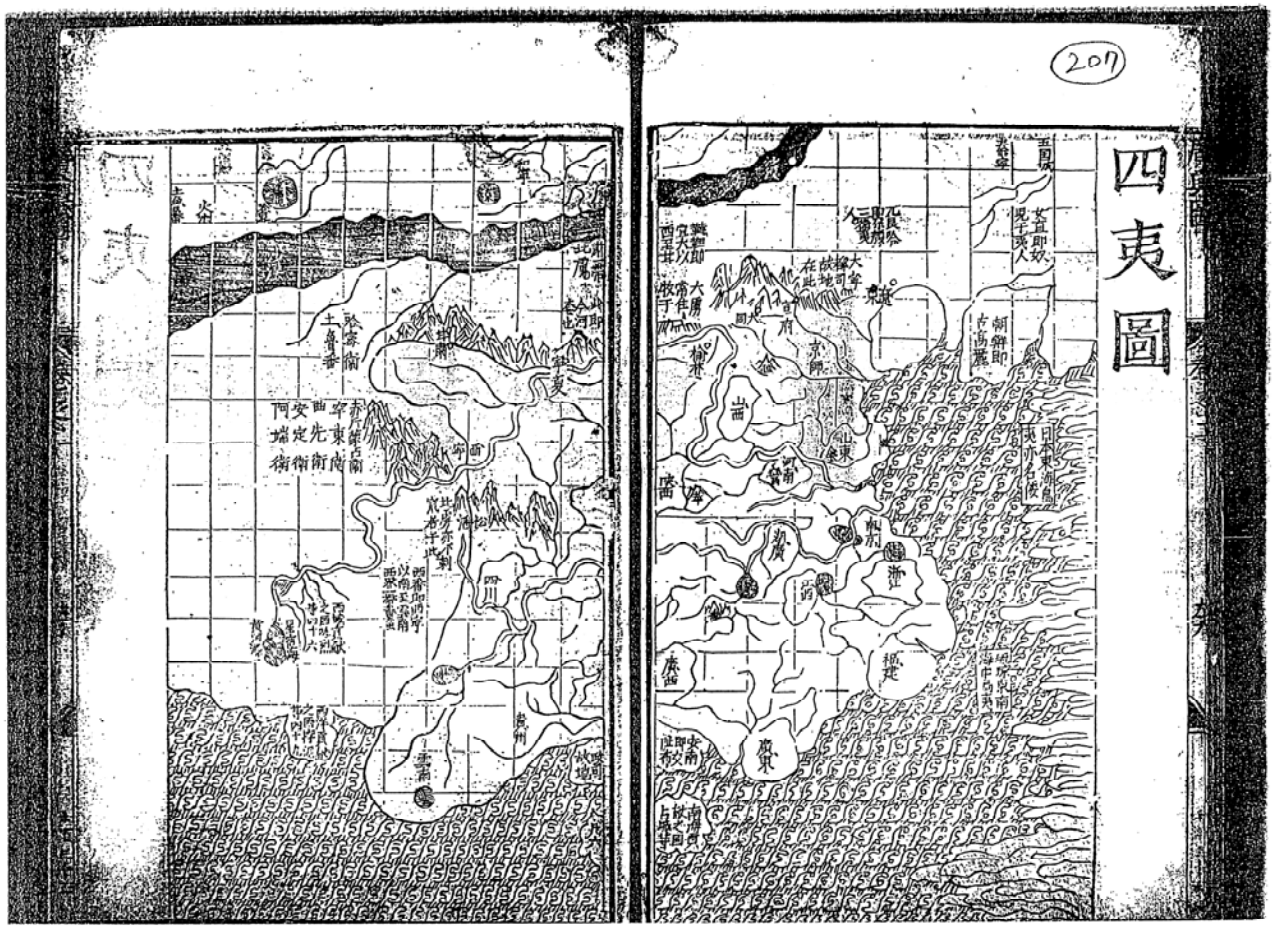
海東諸国総図（海東諸国紀）



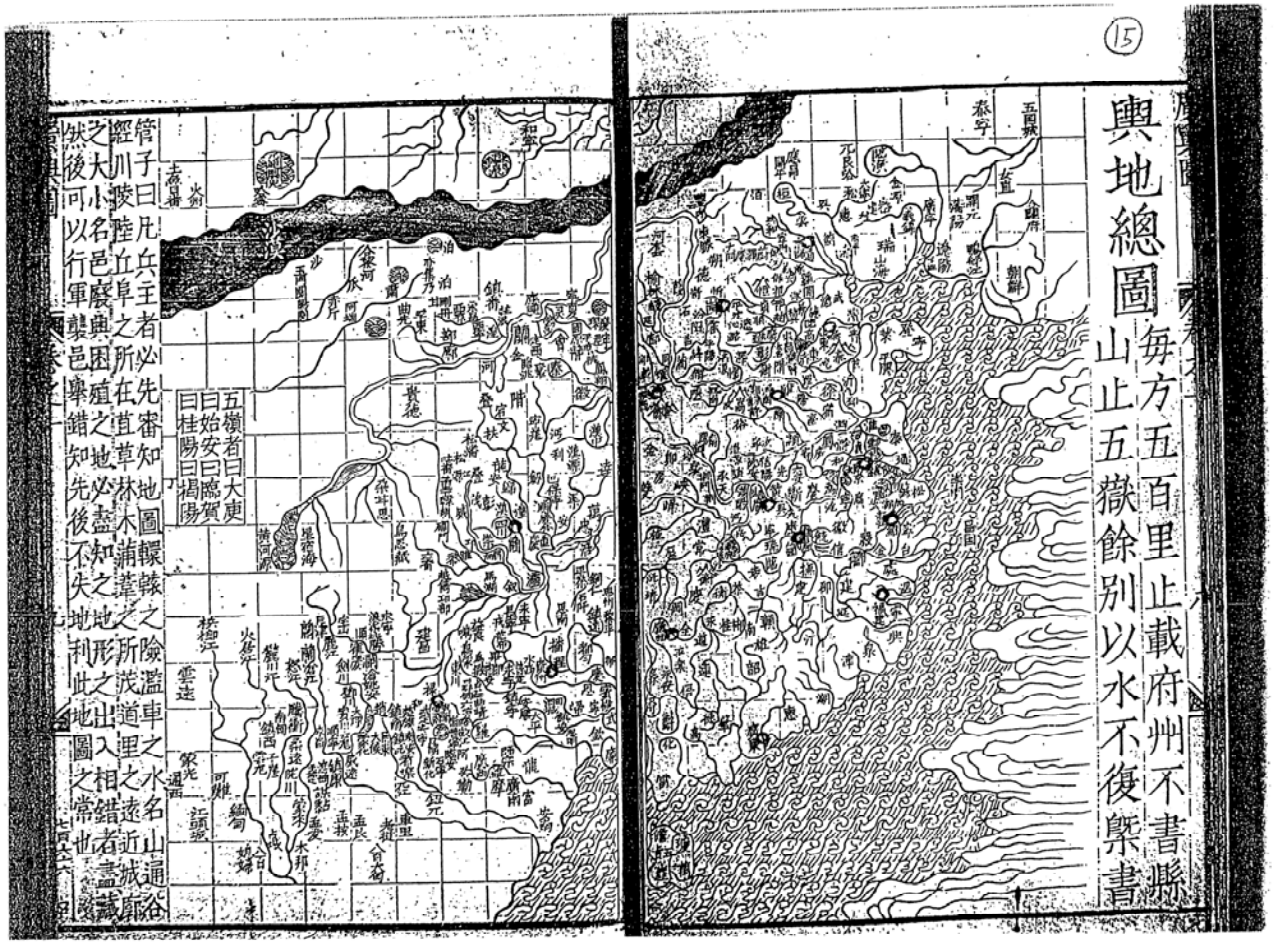
Ⅱ－5　四夷の世界：四夷図

1. 3版から掲載（6版以降は「華夷総図」）
2. 『広輿図』中の「輿地総図」とほぼ同じ領域を描写するが、海岸線の違いが目立つ。
3. 日本、琉球、南海諸国（「占城等凡六」あるいは「安南即交阯布政司故地」）、西洋諸国（「悖泥等四十九」）の記述は明代の国際関係を反映している。地図参照。
4. ここでも「輿地総図」は「四夷図」から影響を受けず。

四夷図（あるいは華夷総図、同前）



輿地総図（同前）


輿地總圖
每方五百里止載府州不書縣
山止五嶽餘別以水不復槩書
管子曰凡兵主者必先審知地圖轘轅之險溫車之水名山通谷經川陵陸丘阜之所在草林木蒲葦之所茂道里之遠近城廓之大小名邑廛里居殖之地必盡知之地之出入相錯者盡識然後可以行軍襲邑舉錯知先後不失地利此地圖之常也

Ⅲ　テキスト内部の相互関係

1. 広輿図全体を通じた原則：新たな地図の掲載が従来からの地図の描写に影響を与えない。
2. 結果的に地図帳のなかで、ある特定の地域が別々の地図で異なった表現をもつことになる。
3. 海域世界研究から見れば、「東南海夷図」、「西南海夷図」、「朝鮮図」、「安南図」、「琉球図」、「日本図」、「四夷図」は、それぞれ時代が異なる地域観を反映したものとして分析できる。

参考文献1

- 海野一隆（1966年）「広輿図の諸版本」大阪大学教養部『研究集録　XIV　人文・社会科学』147－164頁。
- 海野一隆（1975年）「『広輿図』の反響」大阪大学教養部『研究集録　XXIII　人文・社会科学』1－34頁。
- 海野一隆（1978年）「ヨーロッパにおける広輿図」大阪大学教養部『研究集録　XXVI　人文・社会科学』1－28頁。
- 海野一隆（1979年）「ヨーロッパにおける広輿図（承前）」大阪大学教養部『研究集録　XVII　人文・社会科学』39－86頁。

参考文献2

- 高橋公明（2008年）「『広輿図』のなかの南海諸国」名古屋歴史科学研究会『歴史の理論と教育』129・130合併号、33－46頁。
- 高橋正（1963年）「東漸せる中世イスラーム世界図」龍谷学会『龍谷大学論集』第374号、77－95頁。
- 高橋正（1966年）「『混一疆理歴代国都之図』再考」龍谷大学史学会『龍谷史壇』56・57合併号、204－215頁。
- 高橋正（1973年）「『混一疆理歴代国都之図』続考」龍谷学会『龍谷大学論集』第401・402合併号、586－600頁。

参考文献3

- 高橋正（1975年）「元代地図の一系譜――主として李沢民図系地図について――」大阪大学文学部『待兼山論叢』第9号、15－31頁。
- 高橋正（1980年）「中国・朝鮮製地図に見える初期日本図」天理図書館報『ビブリア』75号、426－433頁。
- フックス（1946年）：Walter Fuchs, *The "Mongol Atlas" of China by Chu Ssu-Pen and the Kuang-Yü-T'u*, Monumenta Serica, Monograph VIII, Peiping, Fu Jen University, pp. 1-48.

参考文献4

宮紀子（2004年）「『混一疆理歴代国都之図』への道——14世紀四明地方の『知』の行方——」藤井譲治・杉山正明・金田章裕編『絵図・地図からみた世界像』、3－130頁。

皆様のご静聴に感謝いたします。